

THE **A** MUSEUM

Vol.15-12 第44号 2021.3.2

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore



特別展

銘

仙



大正・昭和の毎日を、
ちよつと素敵に
したキモノ



令和3年1月から開催予定だった特別展「銘仙」は新型コロナウイルス感染拡大防止のため博物館が休館となり、残念ながら中止となりました。艶やかな数々の銘仙が並ぶ姿は、まさに圧巻でした。今回の博物館だよりでは、中止となってしまった特別展「銘仙」をほんの少しですが、ご紹介します。



大正から昭和にかけて、絹織物でありながら実用的な日常着として広まった「銘仙」。とりわけ、新しい文化と染色技術の発展が生んだ、斬新で大胆な銘仙の模様は、多くの女性たちを魅了しました。

本展覧会では、秩父の暮らしを支えた銘仙に注目し収集してこられた木村和恵氏が、平成 30 年度 (2018) に当館へ寄贈されたコレクションを中心として、銘仙の誕生と流行を紹介しました。

プロローグ

「考現学」を提唱した今和次郎は、東京銀座の世相・風俗に着目し、大正 14 年 (1925) 5 月に京橋から新橋の間を歩く人びとの装いを調べました。洋装のモガ (モダンガール) が巷の注目を集めていましたが、実際にはほとんどの女性が和装の時代でした。この調査によれば、銀座の街を行く女性たちの半分以上が、銘仙の着物を身にまとっていたそうです。銘仙は、街歩きに適したお洒落着として、当時の女性たちに愛用されていたのです。

第1章 繭の里

銘仙の主要な生産地となったのは、秩父のほか、伊勢崎、足利など、関東地方の養蚕業や織物業が盛んな地域でした。絹織物は、蚕が作った繭を紡いで糸にし、それを織り上げて作られます。埼玉県秩父地方では、蚕を育てる養蚕業が近代以前から行われており、横浜開港以後、生糸が重要輸出品となるとその需要は拡大しました。農家にとって養蚕業は重要な現金収入の手段であり、蚕のことをオコサマ、オカイコと呼び大切にしました。

生産工程では出荷に不向きな玉繭などの屑繭が出ます。玉繭とは蚕が 2 頭で作った少し大きな繭のことです。こうした屑繭から糸を取り、それを利用して生糸や絹織物も生産されました。銘仙はこうした手近な絹織物から出発しています。

戦前まで、機織りは女性にとって大切な仕事でした。秩父地方では機屋から生糸を預かり、絹布に織って納める「賃機」も盛んに行われ、家々からは杼をひく音や機織唄が聞こえていたといわれています。銘仙を生み出した繭の里では、様々な形で絹織物の生産が行われていたのです。



玉繭 (埼玉県秩父農林振興センター提供)

第2章 華開く模様銘仙

屑糸から作られた日常着用の絹織物は、もともとは縞模様や無地が多く作られていましたが、緋織の技法を取り入れるなどして模様表現が工夫されてきました。その過程で大きな画期となったのが、明治 40 年代に広まった「ほぐし織」です。この技法では、整経した経糸に緯糸を粗く織り込み (仮織)、型紙を使って模様を擦り込みます (捺染)。別に先染めた緯糸で織りあげる際、仮織の緯糸をほぐしながら作業するので、「ほぐし織」と呼ばれるようになりました。

ほぐし織の登場で大きく変わったのは、型紙で模様を作ることにより、それまでは難しかった滑らかな曲線やたくさんの色の使用が可能になったことです。ほぐし織によって豊かで大胆な模様表現を実現した銘仙は、「模様銘仙」と呼ばれました。ほぐし織



あかむらさき じょうばなみずたまもようめいせん
着物 赤紫地洋花水玉模様銘仙



みどり じぶどうもようめいせん
着物 緑地葡萄模様銘仙



あらぞめ じばらもようめいせん
着物 退紅地薔薇模様銘仙



そめわけ じはなもようめいせん
着物 染分地花模様銘仙



あさぎ じよつともようめいせん
着物 浅葱地ヨット模様銘仙



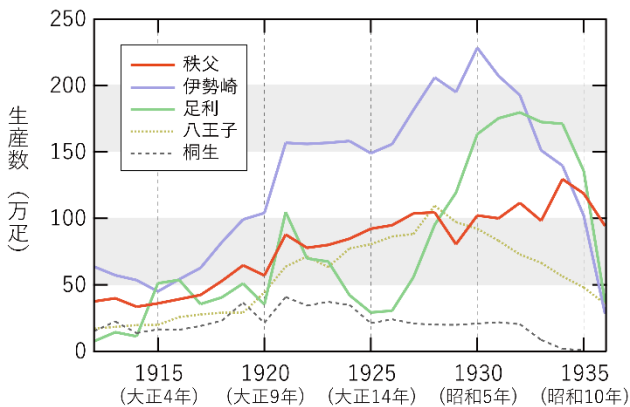
そめわけ じちゅうしょうもようめいせん
着物 染分地抽象模様銘仙

は量産にも向いていたので、庶民の着物に適していました。

模様銘仙の絵柄は、なじみ深い花の意匠から、西洋文化の影響まで多様であり、当時の流行がうかがえます。また、写実的な描かれ方だけではなく、モチーフが分からないほどデザイン化された抽象的・幾何学的な模様も見受けられます。模様銘仙は、アール・ヌーヴォーやアール・デコなど西洋の美術様式の影響も受けながら、各生産地で咲き誇りました。

第3章 流行の創出

銘仙の人気が高まるにつれ、関東地方の西部から北部の地域を中心に、その生産は拡大していきました。銘仙主要産地における生産量の推移をみると、大正10年頃と昭和5年頃に最大となっており、戦前の銘仙生産がピークに達したのがこの時期だということが分かります(グラフ参照)。こうした流行の背景には、各産地の努力のほか、百貨店や婦人雑誌による宣伝活動がありました。



(グラフ) 銘仙主要産地における生産量

昭和時代前半、百貨店が、顧客層を一般の人々まで拡大しようとする試みのなかで、人々を引きつける目玉商品としたものの一つが、銘仙でした。なかには、直接、産地とのやり取りをし、新たなデザイン開発を促したり、製品を安く仕入れたりする店も現れました。この時期の各百貨店では、銘仙の特売会・展示会が盛んに開催されています。

流行を創り出した存在として「婦人雑誌」の存在も見逃せません。主要産地が雑誌社と協力し、現在でいうところの「コラボ商品」の発売が企画されました。これは、有名図案家や画家がデザインした銘

仙を、各産地で商品化し販売する企画でした。オリジナルデザインの銘仙は写真付きで宣伝され、読者の購買意欲を刺激しました。

一方の産地も、様々な工夫を凝らし新たな商品開発に努めました。ほぐし織は経糸を型染めし、単色の緯糸で織る技法ですが、緯糸を複数の色に染め分けたり、緯糸にも型で模様を染めたりすることで、これまでとは異なる印象の製品をつくり出したのです。こうして模様銘仙はさらにデザインの幅を広げることになりました。

エピローグ

大正・昭和時代の人々の暮らしに寄り添ってきた模様銘仙も、戦後の生活様式の変化や、洋装の普及に伴って、存在感を失っていきました。一方で、ほぐし織の技術を伝える工房や職人によって、今も銘仙の生産は続けられており、近年では、地域や近代の暮らしを語る資料として、銘仙に注目する動きも見られます。



着物 黒地花模様銘仙

本展示会では、銘仙のデザイン的なおもしろさはもちろんのこと、銘仙を育んだ地域性、作る側・売る側・買う側の思いが交錯して生まれた流行など、銘仙の背景にも注目しました。残念ながら、1日も開かれないまま終了となりましたが、展示の内容は展示図録で御覧いただけます。

(展示担当 戸邊優美)

歴史特集展示「国宝太刀・短刀の公開」

当館では、国宝の「太刀 銘 景光・景政」「短刀 銘 備州長船住景光」を所蔵しており、例年期間を限定して特別公開を行っています。

令和2年度は、令和3年1月30日（土）～3月7日（日）に公開する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大、それに伴う緊急事態措置の影響で、残念ながら中止となりました。

これらの太刀・短刀は、武蔵国秩父郡大河原郷（現東秩父村）を本貫とし、播磨国宍粟郡三方西（現兵庫県宍粟市）に移住した武蔵武士、大河原氏が備前国長船（現岡山県瀬戸内市）派の刀工に作らせたものです。太刀は銘文から廣峯神社（兵庫県姫路市）へ、短刀は刀身に刻まれた「秩父大菩薩」の文字や「兄弟刀」とされる御物太刀との関係性から秩父神社へ、それぞれ奉納されたものと考えられています。大河原氏や同族の中村氏が所領とした三方西は、良質な鉄（千種（草）鉄）の産地として知られており、国宝太刀・短刀の材料にはこの鉄が使用された可能性もあります。

2口の内、短刀の方は、戦国時代に上杉謙信が愛蔵したと伝えられることから、「謙信景光」とも呼ばれます。当時のものとされる小サ刀拵（鐔の付いた短刀の拵）が付属しています。



国宝 短刀 銘 備州長船住景光（撮影：要 史康）

今回の特集展示では、正宗十哲の一人とされる志津兼氏に極められた刀、源氏重代の宝刀髭切・膝丸を描いた「髭切膝丸絵巻」などの関連展示（「髭切膝丸絵巻」のみ常設展示室第4室、その他は第3室で展示）も行う計画でした。この内容は、可能な限り次回の展示に反映させたいと思います。

昨年来、地球規模の新型コロナウイルス大流行により、日本各地でも妖怪「アマビエ」など、疫病関

係の伝説が注目されています。近年当館所蔵となった刀剣関係資料の中にも、興味深い伝承を持つものが含まれていますので、今回の展示に代えて以下に紙面で御紹介します。

それは、大坂の刀工、初代和泉守国貞の刀を収めた木製の刀箱です。この刀箱は、上記の刀とともに、氷川神社社家である西角井家に伝えられたものです。

蓋の表には、「稜威 霊太刀」と墨書されています（「稜威」とは激しい力のある

意）。そして、蓋の裏に墨で書かれた明治15年（1882）7月31日の銘文には、次のような逸話が記されています。

“千葉県中野台村（現野田市）の住人が、悪疫にかかった家族のため氷川神社に祈祷を依頼した。社家である西角井氏が古くから家に伝わる宝刀を貸し出したところ、病はたちどころに治癒したので、依頼者はこの刀箱を作って宝刀を収め、返却した。”

当時の詳しい状況は分かりませんが、明治15年7月末といえば、ちょうどコレラが流行していた時です。銘文に記された「悪疫」は、コレラであった可能性も考えられます。氷川神社の祭神の一柱である須佐之男命は、疫病除けの神様としてよく知られていますので、当社に病氣平癒の祈祷が依頼されたのでしょうか。ちなみに、現在箱の中に収められている刀がこの「霊太刀」かどうかは、残念ながら確定できません。



悪疫退散の靈験を記す刀箱
（右・蓋表、左・蓋裏）

（展示担当 根ヶ山泰史）

民俗行事を記録する

—無形民俗文化財調査事業をととして—

春の神楽、夏の獅子舞、秋の餅つき踊りや万作踊りなど…埼玉県内の各地には、様々な行事やお祭りが現在も伝えられています。地域の方々によって行われている行事やお祭りは、私たちの先祖が積み重ねてきた暮らしによって生まれ、同時に将来の私たちの歴史や文化を形作っていくものでもあります。当館では、こうした行事や祭りの姿を後世に伝えるべく、学術的な調査を行ってきました。

平成 28 年度から始まったこの事業は「文化遺産調査活用事業」（無形民俗文化財調査事業）という名称で実施されています。4 年間にわたって、県内各地の“神仏、もしくは神仏に縁のあるものを奉持して地域内を廻る行事”について調査を実施しています。昨年度には、これまでの調査成果をまとめた『巡り・廻りの民俗行事総括報告書』を刊行しました。報告書では、調査で取り上げた行事に関する詳細報告や、同種の行事の県内における分布について報告をしています。

報告書のような紙媒体での報告も重要なのですが、行事や祭りを記録するにあたって有効な方法の一つに、映像での記録作成があります。というのも、文字や写真だけでは、当日の雰囲気や細かな人の動きをすべて記述することは難しく、一日の流れに沿って、行事の雰囲気や地域の人々の様子も交えながら、何が起きているのかについて整理するためには、映像での記録が適しているのです。

もちろん、映像記録にも不得手なところがあります。映像記録は起承転結の流れを作って紹介するので、行事の細かな点を調べたい際には紙媒体の報告書で調べるほうが早いですし、地域に残された文字記録や歴史的資料の詳細を細かく記録していくことは映像ではあまり向きません。手元があればすぐ手繰って読むことができる報告書に比べ、映像を再生する機械がなければ再生できないというのもデメリットです。

したがって、行事や祭りについて記録に残す場合は、紙媒体（文字）のものと映像記録（動画）の両

方を作成し、双方がお互いの足りないところを補い合うのがベストということになります。当館では、できる限り、記録作成の際には、紙媒体のものと映像を併用する方向で行ってきました。映像で記録を残すことは、費用も労力もかかるので、一度に何本も作成することは難しいですが、調査の段階で「動画で記録を作成したほうが良い」と判断されたものについて、映像記録を作成してきました。

これまで作成してきた映像記録は、「^{みだ}箕田の^{ひやくまんべん}百万遍」（平成 30 年度）、「^{ほんかむまた}今井・本川俣の廻り地蔵」（令和元年度）、そして、現在、今年度末の完成を目指して「^{ばんしやうめん}番匠免の大般若経祭り」を製作中です。いずれの映像記も、当館職員が調査で得られた成果を踏まえて、その行事の主たる部分や、学術的見地から重要だと考えられる部分が正しく伝わるよう、ナレーション原稿や使用する映像の配置を工夫し完成したものです。



写真 現地ロケハンの様子
編集作業前に地域を歩いて行事の流れを確認しています

すでに完成している 2 つの映像記録については、県内の図書館等で公開をしています。なかなか他地域で行われている行事やお祭りについて見る機会は少ないと思います。ご興味のある方はぜひご覧にいただけたらと思います。

（資料調査・活用担当 後藤知美）

ミュージアムヴィレッジ大宮公園

ミュージアムヴィレッジ大宮公園（以下 MVO）をご存じでしょうか。

MVO とは東武アーバンパークライン大宮公園駅を起点とした半径 1km に位置する 9 つの施設のエリア名称です。9 つの施設とは、「東武鉄道 大宮公園駅」「大宮盆栽村」「さいたま市立漫画会館」「さいたま市大宮盆栽美術館」「埼玉県立歴史と民俗の博物館」「大宮公園」「武蔵一宮氷川神社」「NACK5 スタジアム大宮」「さいたま市立博物館」です。

博物館や美術館にとどまらず、鉄道事業者やスポーツ施設など、業種・業態を異にする施設が、各施設の個性を生かしながら相互に連携し、地域の活性化や情報発信の強化を図るカルチャー&スポーツエリアとして平成 23 年に始動しました。

MVO では、各施設がコラボしたイベントを開催したり、各施設の情報を発信したりしています。

今年は新型コロナウイルスの影響もあり、例年と同じような活動はできませんでしたが、通常時の活動をご紹介したいと思います。

（1）ウォーキングツアー

MVO の利点は各施設に歩いて行ける点です。この利点を生かし、複数の施設を見学するウォーキングツアーを秋に開催しています。

例年開催しているウォーキングツアーは、NACK5 スタジアムのバックヤード見学を軸に大宮公園内の小動物園や歴史と民俗の博物館を見学する親子向けのツアーです。なかなか足を踏み入れることのないスタジアムのバックヤード見学は好評です。



（写真は平成 27 年のものです）

今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、

スタジアムの入場が制限され、実施することが出来ませんでした。来年度は実施できたらと思います。

（2）スタンプラリー

加盟 9 館を巡るスタンプラリーを例年冬に実施しています。7 個以上スタンプを集めると景品と交換できますが、抽選の W チャンス賞には大宮アルディージャのレプリカユニホームや盆栽などの珍しい景品もあり、多くの方にご参加いただいております。

普段は訪れることのない施設を訪れる良い機会になると思います。また大宮盆栽村や大宮盆栽美術館のある盆栽町は並木道など美しい景観が広がっており、散策しながら各施設を巡るのも楽しいと思います。

今年度は、不特定多数の人が触るスタンプラリーは中止とし、代わりに各施設にキーワードを掲示して、ある言葉を完成させるキーワードラリーに変更しましたが、たくさんの方にご参加いただきました。

（3）展示解説講座

春先にはさいたま市立博物館、漫画会館の特別展を中心に展示解説講座を実施しています。

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となりましたが、平成 30 年度は大宮盆栽美術館で、さいたま市立博物館、漫画会館の特別展に関する講座と大宮盆栽美術館の展示解説を実施しました。複数の博物館・美術館の特別展に関する話を一度に聞くことのできるちょっとお得な展示解説講座です。

MVO に加盟している施設の多くは博物館・美術館ですが、歴史・漫画・盆栽とジャンルが全く異なり、どの施設に行っても新しい発見があると思います。また多種多様な施設が集まっているため、普段はあまり赴くことのないジャンルに触れるチャンスでもあります。

MVO では公式ガイドブックを各施設で配布しています。各施設の概要や見どころ、散策モデルコースなどが掲載されています。ぜひガイドマップ片手に新しい発見を探しに出かけてみませんか。

（企画担当 倉澤麻由子）

MVO「大宮公園の歴史を歩く」

令和2年12月5日(土)にミュージアムヴィレッジ大宮公園(以下MVO)主催の大宮公園の歴史を知るウォーキングツアーを実施しました。(※MVOについては7ページをご覧ください。)

例年、親子向けにNACK5スタジアムのバックヤード見学を中心としたウォーキングツアーを実施していましたが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、NACK5スタジアムの入場規制など様々な制約があり、中止となりました。

そこで、従来のウォーキングツアーの代わりになるイベントはできないかと考え、企画したのが「大宮公園の歴史を歩く」ウォーキングツアーです。

大宮公園に残されている記念碑や旧跡などを巡り、大宮公園の歴史を知るウォーキングツアーです。大宮公園を歩くツアーなら、三密を回避できると考えたからです。

当日は朝から冷たい雨が降り続いていましたが、事前に申し込んで下さった多くの方が参加して下さい、傘を差しながらのウォーキングツアーとなりました。

大宮公園の始まりは明治18年(1885)、地元の要望で作られた氷川公園です。

大宮公園の北端にある歴史と民俗の博物館を出発し、まずはボート池やもはや当時の面影は門柱しか見当たらない大宮遊園地ホテルについて解説しながら大宮公園の中心へ。



児童遊園地や小動物園は参加者の多くがご自分が子どものころ、またはお子さんを連れて遊びに来たことがあるようで、懐かしそうにご覧になっていました。



武蔵一宮氷川神社は明治元年に勅祭社となる勅書が出され、明治天皇の行幸が決定します。その後も歴代の天皇や皇后が氷川神社を訪れ、その記念碑が大宮公園内に残されています。写真は大正天皇の皇后が行啓されたことの記念碑です。

参加者のみなさんと道すがらお話をしていると、多くの方が、大宮公園の思い出があり、その事を伺うことができました。お話を聞いていて、改めて実際に見たこと、体験したことの記憶というものは強く残るものだなと感じました。

「何度も来ているけど、こんな記念碑があるなんて知らなかった」と仰っていた方の記憶に少しでも今回のウォーキングツアーが残ってもらえたら嬉しく思います。

今回は大宮公園に限定した2時間弱のツアーでしたが、大宮公園の歴史を語るには足りないぐらいでした。今度はもう少し暖かい時期に、ツアーを開催したいと思いました。

そういえば、大宮を象徴するものの1つに「盆栽」があります。MVOには大宮盆栽美術館や大宮盆栽村が加盟しています。これらの施設が所在する盆栽町は関東大震災で被害を受けた都内の盆栽師や植木職人が大正14年(1925)に集団移転し、開村した盆栽村が始まりです。当時から二階屋を建てないこと、塀は生垣にすることなど、今日の景観保護の理念が先取りされ、今の盆栽町が作られました。次は盆栽町に焦点を当てたウォーキングツアーも面白そうだなあなんて考えています。

(企画担当 倉澤麻由子)